
mustLIVE -何があっても、絶対に-

又里ゆたり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

m u s t L I V E - 何があっても、絶対に -

【Nコード】

N 3 7 4 2 B A

【作者名】

叉里ゆたり

【あらすじ】

『今』を平和に過ごしている主人公・杜野 遊里。

しかし、彼には誰にも話せない秘密を隠し持っていた。

学校で「いじめ」に逢っている紅髪の少女・五十嵐 弥風との出逢いが、彼の世界を変えていく。

注意：過去に他サイト等で投稿した小説にて、登場人物の名前が一部被っております。ご容赦ください。

人気者〃嫌われ者

部活で良い汗をかいて、帰ろうとしたら教室に明日締め切りの課題を忘れた。

俺は数学の成績が悪い。今まで課題提出で辛うじて単位を稼いでいたようなものだ。

早くしないと学校が閉まってしまう。本来なら生徒は帰らなければいけない時間。急ぎつつも大嫌いな数学の為にしぶしぶ4階の教室へと足を運んだ。

息を切らして着いた教室。クラスメイトの机の置き勉強が目立つ。そんな事より、早く課題を持って帰らなければ。あーあ、数学なんて社会に出て役に立つのかよ。

コツ、コツ。

「……？」

これは誰かの足音。先生だったらまずい。ばれないようにそっと教室のドアを開けてみた。

そこで、俺は全てを奪われる感覚を味わった。

目の前の、綺麗な紅の髪をした謎の少女に。

m u s t L I V E - 何があっても、絶対に -

ピンポンパンポーン、と学内放送のチャイムが鳴る。

『体育科2年、杜野^{もりの}。至急数学担当の佐藤のところまで！。』

「げっ、まじかよ…あれでも出来るところはやったのに…」

「遊里^{ゆつり}、お前の数学はやったのに入らねえって。素直に誰かのをカンニングすれば良かったのによお。」

「残念、俺はお前とは違って基本のルールは突き通してるんでね。」

「お前…そういうところはしっかりしてんのな…」

俺は、杜野^{もりの} 遊里^{ゆり}。高校2年の16歳。生粋の体育会系男子だ。

昔、名前と見た目からよく女の子と間違われた。

恥ずかしい話だがファーストキスが4歳。しかも相手は男で、無理矢理キスされたいという最低な思い出がある。

体育会系なだけあつてある程度は体格に救われているが、昔の名残なのが見る人によつては高校生になった今も女に見えなくもないと言われることもしばしば。

俺はゲイでも女でもない。普通に好みは女の子。健全な男だつての。

先程呼び出しをくらつた原因の数学は、入学以降学年最下位の座を守り続けている。

だがその分陸上ではそれなりの成績を収めている。

気がつけば地元では有名になつていたらしく、知らない女の子の集団にストーカーされていたなんて事も。

幸いな事に、最近よく話題になつていいるいじめなどの経験は無い。さっきの奴みたいオープンな会話が出来る友達が増山いる。『今は、表向きは幸せだ。』

でも、俺には誰にも言えない隠し事がある。
この隠し事がばれたら、きっと俺は…

今まで築いた『全て』を失う事になる。

「よお、『リストバンド風雲児』！今日も絶好調だな！」

部活中に時々突然現れる、背の高い金髪の先輩。名字は…なんか2つの単語を掛け合わせた感じの人。

俺の耳元で部活仲間の先輩が喋る。

「また来たよ、駒木川^{こまきがわ}。あいつに捕まると厄介だから、あっち行こうぜ。」

先輩に言われるがままに、こまみがわさん（だっけか？）から離れる俺達。

すると、彼（既に名字を忘れた）は不機嫌そうに近くに捨ててあった空き缶を蹴って、グラウンドから去って行った。

「うつわー、危なかったな。あいつ、最近杜野に目をつけてる感じだから気をつけろよ。」

「……」

「いつその事、いつも左腕に着けてるリストバンドはずしちゃえば

？」

……それは、絶対に出来ない。絶対に。

俺は、あの先輩が来るたびに疑問に思う事がある。

さっきあの先輩が言っていた『リストバンド風雲児』っていうのは、テレビ中継があった時に、地元の某ローカル番組が勝手に付けた俺のキャッチフレーズだ。つまり、そのローカル番組を見ている人にしか分からない呼び名だ。

俺が陸上競技で有名になってから、あの先輩は頻繁にやってくるようになった。

きっと、あの先輩も陸上に興味があるのだろう。初めてキャッチフレーズで呼ばれた時、俺の活躍を見てくれていたんだと、正直嬉しかった。是非とも話してみたいと思った。

でも何故か、周りがそれを許してくれない。

「あの、先輩！ひとつ聞きたいのですが…」

「なんだ？杜野が質問なんて珍しいな。」

「どうして、さっき来た先輩が危険なんですか？」

「さっき来た先輩…ああ、駒木川ね！」

先輩は、重い話題にも関わらず、何処となく楽しそうに話を進めた。

「あいつ、1年の時に女の子相手に暴力事件起こしたんだぜ。マジで常識無い奴だよな！」

血濡れ貞子と偽りの人気者

昼休み。俺は席でひとり、もやもやしていた。

『女の子相手に暴力事件起こしたんだぜ。』

『マジで常識無い奴だよな！』

「おい、遊里！」

「……………」

「遊里！おい！」

パン！と手を叩く音。

「…何？」

友人は息を切らして興奮している。なんなんだ。

「俺さあ、遂にこの目で見ちまったよ！血濡れ貞子！」

『血濡れ貞子』は、話を聞く限り、他のクラスにいる幽霊らしい。俺達が所属する体育科は、他のクラスと校舎が離れているから、滅多に別のクラスに行く機会などない。

そもそも俺は幽霊の類などは信じないタイプ。だから今までの友人の話はスルーしてきたが、実際に見たというのなら話は別になってくる。

「へえ…本当に幽霊っているのか？」

「本当にいたんだって！血濡れ貞子！ほら来た来た！」

幽霊が来たなんて、普通は大惨事。そんな事にも関わらず、楽しそうに教室のドアを覗く友人。

クラス内で話題になっているらしく、女子が集団で「お化けだ！」

「マジ怖ーい！」と話のネタにしている様子。

幽霊ってそんな簡単に見えるもんか？

友人の後ろから、俺も初めて血濡れ貞子をこの目で拝む事になる。

（嘘だろ…？）

彼女を見るのは、初めてじゃない。

風に揺れる紅い艶のある長髪。

「きゃー！」

「本物の血濡れ貞子だああ！早く隠れないと殺されちゃうかも！」

間違いない。数学の課題を取りに行った時にすれ違った、綺麗な紅い髪が印象的な、あの少女だ。

この時、俺は初めて『血濡れ貞子』の真実を知った。そして、誰にでも分かる一つの答えに辿り着いた。

放課後。「数学の補習がある」とそれらしい理由で、初めて部活をさぼった。

部活をさぼってでも、どうしても知りたい事があった。

時間は午後6時。この時間は部活動のグラウンド使用のみが許可されていて、数学の課題を取りにいった時と同様に生徒が入るのは特

別な理由が無い限り許可されていない。

勿論数学の補習なんて真っ赤な嘘。本来の目的はまた別だ。

……コツ、コツ。

来た！この音だ！俺は勢い良くドアを開けた。

教室からすぐ見える距離にいた、紅い髪の少女。

少女は俺に気付くと、こちらに鋭い視線を向けてきた。不思議な事に、怖さを感じない。

「びつくりさせてごめん。聞きたい事があるんだ。」

「……………杜野…遊里か。」

初めて聞いた少女の声は、綺麗な髪に劣らず、透き通った声だった。

「あの…嫌かもしれないけど、血濡れ貞子って…」

少女は一言、

「昼休みに知った筈だ、私の事だと。」

「どうして、みんなは君にあんな酷い事を言うんだ？どう考えてもいじめだろ、あれは。」

素直な疑問をぶつけると、少女は一瞬驚いた表情を見せた。本当に一瞬だった。

「……お前は、私が怖くないのか？」

「いや、全然。」

「……変わった奴だな。」

なんだって？俺は（秘密にしている事を抜かせば）そんなに変わった事はしていない。

どっちかと言えば、変わっているのはそっちの方だ。女の子なのに、まるでアニメや映画でかっこいいタイプの女性みたいな話し方をしている。

「髪だ。」

「……え？」

「私は生まれつきで、この通り血のような紅色の髪。両親は、気味悪がって私を捨てた。」

「……！」

ひどい。ひどすぎる。こんな事が現実にあっているのか？

声を掛けたくても、言葉が出ない。何と云えばいいのかわからない。

「同じ赤毛でも、何処かの物語のような魅力も、明るさも、仲間も、未来も私には無い。」

「そんな……」

身動きを取る事が出来ない俺に、少女は言い放った。

「もっとも、平和に暮らしてきたお前には、分からないだろうがな。」

『平和』？

そんなの、俺にとっても今だけのもの。

俺にだって、誰にも言うてはいけない秘密があるんだ。

「分かったよ。君には見せてあげるよ。」

無意識に口に出した言葉と、左腕のリストバンドに向かって伸びる自分の右手。

この校舎には、俺と少女しか残っていない。

だから、この事実を新たに知るのは、少女ひとりだけ。

リストバンドの下の皮膚には、血よりも赤い、所謂原色の赤を背景に、紫色の斑点が今も動き回っては混ざり合って…決して人にあるてはならないもの。

リストバンドの下に隠れるものを見て、無表情を貫いていた少女も目を見開いている。

「ほら、気持ち悪いだろ？これをみんなに知られたら、俺も終わるだ。」

そこで少女が、思わぬ一言。

「痛くないのか？」

ためらい無く、見るだけでおぞましい左腕に両手で触れた少女。

次は俺が戸惑う。なんで、何で逃げない。

「どうしてだよ…これを見ても、気持ち悪いって、怖いって思わないのかよ？」

「全然だな。それより、私の質問に答えろ。」

いつの間にか、立場が逆転している。何だこれ。

「まあね。常に痛いよ。中学の時に事故に逢って、それからこいつが出来たんだ。誰にも知られたくなくて、リストバンドでずっと隠してたんだ。」

でも、今、この場で不思議な事が起きている。

少女が左腕に触れてから、常にかけていた鈍い痛みが治まっているのだ。

「そうか…それを、私なんかに見せて良かったのか？」

「ははは、何で見たんだろうな。自分でもわからないや。」

俺は、薄々感じていた。

この人なら、全てをさらけ出せると。

「五十嵐 いがらし 弥風 みなぎ…」

「…ん？」

「私の名前だ。私だけ一方的にお前の名前を知ってても意味が無いだろう。」

「ありがと。よろしくな、弥風！」

「早々下の名前で呼ぶのか…」

「それと、俺の名前は『お前』じゃないぜ。名前、知ってるんだか

ら気軽に呼んでくれよな。」

「…分かった。」

俺・杜野 遊里と、

紅髪の少女・五十嵐 弥凧の出会い。

すべては、ここから始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3742ba/>

mustLIVE -何があっても、絶対に-

2012年1月9日19時56分発行